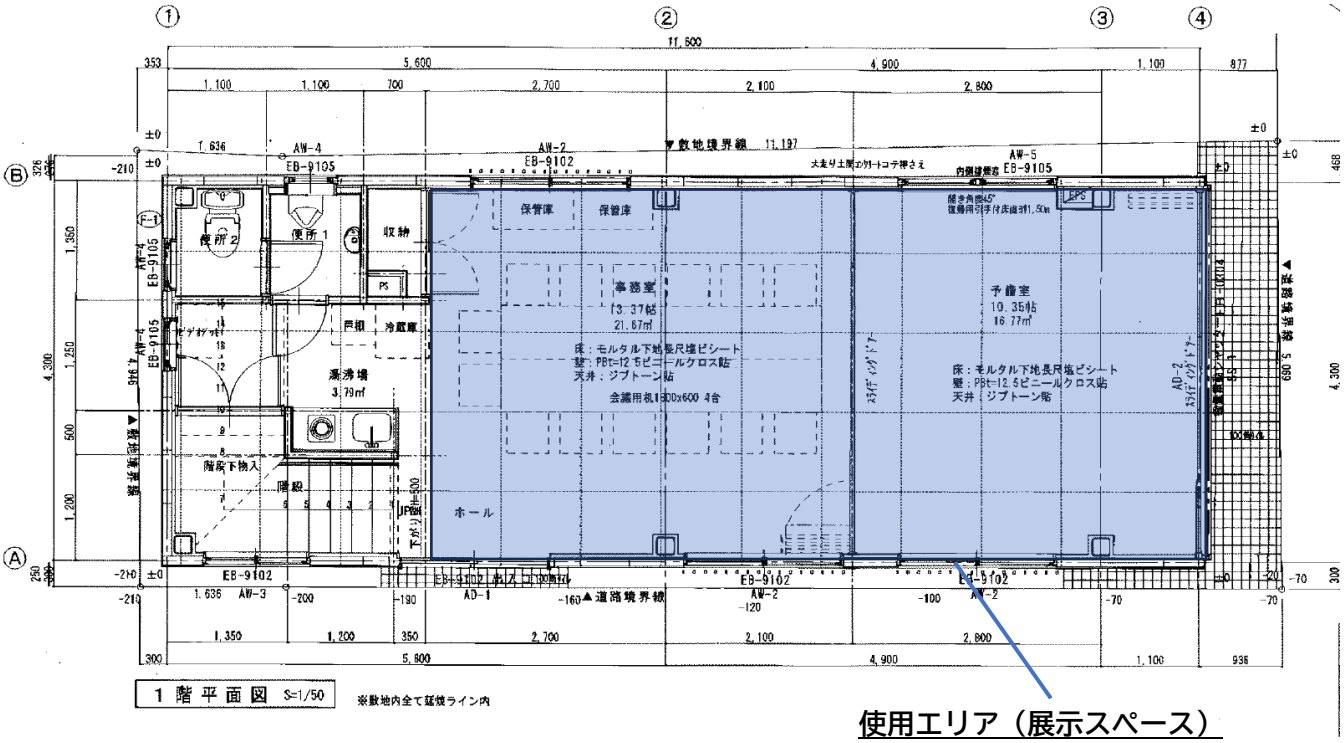
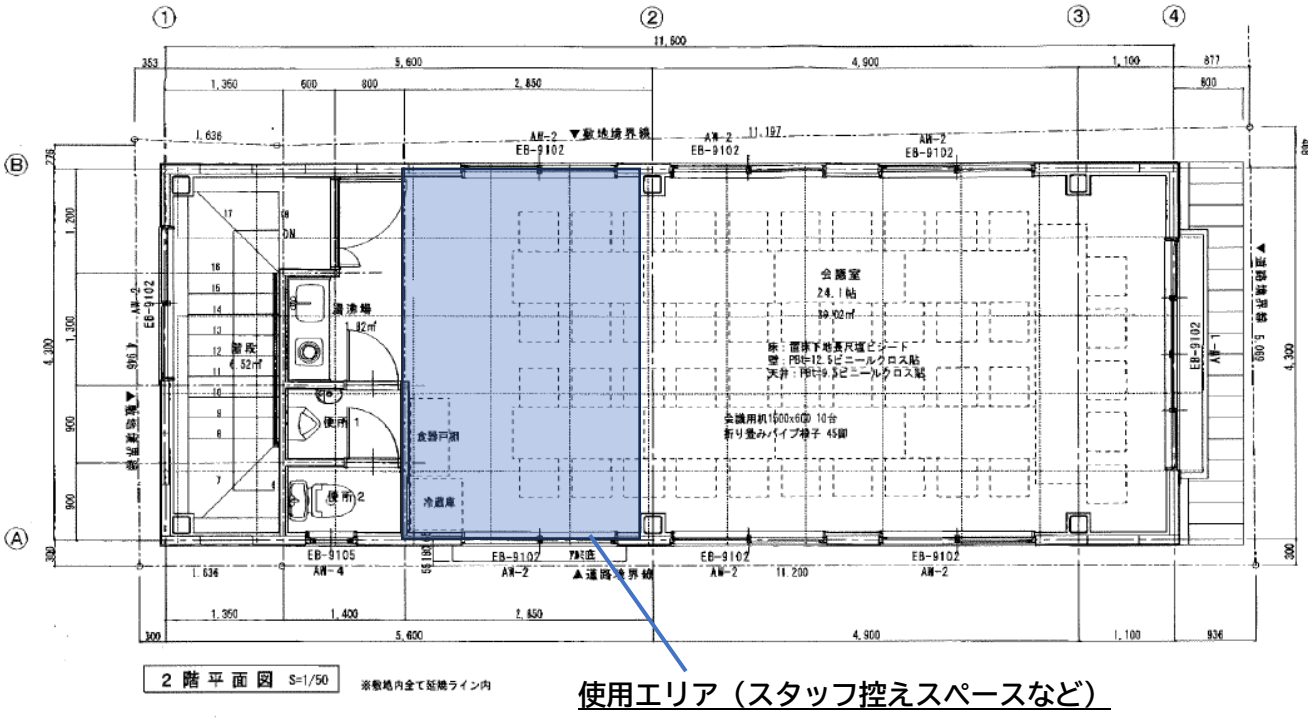
別 紙

計 画 図

吉原会館１階



吉原会館２階



別 紙

※下記什器、展示品は展示および運営に使用することが出来る。

・什器

展示ケース３台 （W1200×D600×H900）	長机４台 （W1500×D600×H700）	イス４脚

・展示品

＜大河ドラマ「べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～」撮影使用品＞

暖簾２枚 （W1700×H1400）	案内１枚 （W350×H500）	日よけ暖簾１枚 （W1750×H2000）
暖簾１枚 （W16200×H400）※1 巾 W450	暖簾１枚 （W3500×H300）	行燈１台 （W480×D480×H1360）

別 紙

＜パネル＞

パネル【江戸文化が花開いた幕府公認遊郭 吉原】
A0 サイズ（W841×H1189）

【江戸文化が花開いた幕府公認遊郭 吉原】

元和４年（1618）、江戸唯一の幕府公認遊郭として日本橋葺屋町に開設された吉原は、明暦３年（1657）の明暦の大火の後に、浅草の北部（現在の台東区千束）へと移転しました。

当時の吉原は江戸の外れにあった辺部な土地で、周囲を堀と塀で囲まれた吉原遊郭の広さは約220ｍ×330ｍ。出入口は大門に限定され、最盛期には3000人の遊女が生活していました。

このうち“花魁”と呼ばれた高位の遊女はごくわずかで、多くは地方の貧しい農家から年季奉公という名目で連れてこられたことにより、前借金の返済に縛られて働かざるを得ない地過の女性たちでした。吉原では現代の社会通念に照らして、人権侵害や女性蔑視にあたる行為が行われていたことは明らかであり、こうした制度は現在では許されず、二度と出現してはならないものです。

一方で、吉原は公認遊郭として独自のしきたりと秩序があり、市中の遊郭（岡場所）とは全く異なる格式と洗練を備えた遊興の場でした。客は“通人”として美意識を磨き、遊女たちは和歌や漢詩、書、茶の湯、華道、琴、三味線などの一流の教養で客をもてなしたことで、そこに文化が花開きました。

江戸中期になると吉原の遊客は武士階級だけでなく、豪商や庶民にも広がり、狂歌の歌会や書画や音曲の披露といった交流・接待も盛んに行われるなど、社交場や文化サロンとしての役割を果たすようにもなります。

また、メインストリートの仲之町通りでは３月になると桜が植樹され、８月には俄（芸者による即興芝居）が開催されるなど、贅沢に非日常が演出された年中行事は、吉原側のみならず、江戸庶民や地方から江戸を訪れた人々の人気のスポットとなり、憧れの場所でもありました。

吉原を舞台とする文芸、浮世絵、歌舞伎などは江戸庶民を楽しませ、遊女たちの髪型やファッションが江戸市中に流行するなど、吉原は江戸文化の中心地であり、流行の発信地だったのです。